



【編集・発行/札幌くらぶ】 064-0931 札幌市中央区中島公園1-15 札幌交響楽団事務局気付
 メール: info@sakkyoclub.net
 ホームページ: http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

2013. 10

64

第4回 札幌くらぶサロン開催

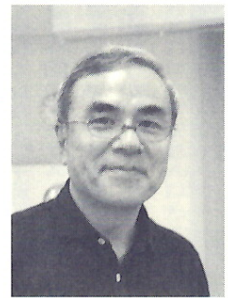
第4回札幌くらぶサロンが、9月7日(土) 17:30より札幌市教育文化会館(北1西13) 402号室で35名が参加して開催しましたので、その様子を報告致します。案内されていた内容と変更がありましたので、当日のプログラムをご紹介します。第1部は「ゲストが語る札幌名演奏の想い出」で、お話は元札幌コントラバス奏者の藤澤光雄さんと竹津宜男さん、想い出の曲は第100回定期(1970年11月20日)のペーター・シュヴァルツさん指揮ブルックナー「交響曲第7番」から第2楽章アダージョ、第2部は「札幌アーカイブ・シリーズ」でナビゲーターは竹津宜男さん、今回の曲は第121回定期(1972年11月15日)のステニエク・コシユラーさん指揮ドヴォルジャーク「交響曲第8番」全曲、第3部は「交流パーティー」で、冷たいビール・美味しいワインとオードブルをいただきますながら「札幌と音楽をいっぱい語りましょう!」という盛り山の内容でした。

今回のゲスト藤澤さんとナビゲーター竹津さんのお話は、当時はブルックナーがまだそんなに演奏されていない頃で大変な名演で話題になったという事、シュヴァルトツさんのとても長いフレーズの抑揚が途切れることなく弛まなく繋がっていく音楽造りが素晴らしいというお話が、印象に残りました。また、ドヴォー8はなぜ日本で人気があるのかについてボヘミア音楽でメロディもリズムも親しみやすく心の中で受け止め易いのではないかというお話、コシユラーさんのオーケストラに決して無理を掛けない愛情があり暖かい指導で、最後にはしてやられて旨く抱き込まれているという練習風景が思い浮かびそうなお話など、素敵なお話満載でした。初めての試みとして交流パーティーを設けましたが、今日の曲目を実際にライブで聴いた方も数名いらっしゃって大変盛り上がる中、札幌第1ヴァイオリンの河邊俊和さんや地元オペラ団体LCアルモーニカ代表の南出薫さんのお話もいたたく事ができ、あつという間の中締めとなりました。

次回第5回は来年1月18日(土)を予定しています。札幌を裏で支えるプロフェッショナル(ステージマネージャー)のお話と皆さんからいただいたリクエストコーナーなどを考えていますので、奮ってのご参加お待ちしております。

(上野)

札幌くらぶサロンは私のタイムマシン



1970年から札幌の常任指揮者としてペーター・シユバルツ氏が就任し、ブルックナーの交響曲をたびたび演奏してくださったので、私はすっかりブルックナーファンになってしまいました。

今回、ブルックナーの7番の録音を聴きながら、44年前のこの演奏の空間の中に高1の私がいたのだという不思議な感覚に浸っていました。

竹津さんと藤澤さんの思い出話もとても素敵でした。

次回の札幌くらぶサロンは私をどの時代に連れて行ってくれるのか今から楽しみです。

(札幌くらぶ会員 前野 宏)

札幌くらぶサロンに参加して

岩月 秀広 (札幌くらぶ会員)



今回より名曲喫茶ウィーンから場所を替えて教文の研修室での開催、出席された方の多さにびっくり。札幌のというより北海道の音楽界の生き字引ともいえる竹津宜男さんの札幌の想い出話など、知らざれる札幌の裏話が語られ、多に盛り上がった札幌くらぶサロンでした。感謝!!

それにしてもボルザーク第8シンフォニー全曲、ブルックナーの第7シンフォニー第2楽章、管楽器パートはともかく、弦楽器セクションは本当に綺麗な音を出していました。札幌草創期より弦楽器セクションは素晴らしかったの

家登 正美 (札幌くらぶ会員)



でしようね。スタッフが装置の音を懸念していたようですが、演奏の良し悪しは音色には関係ありません。次回も楽しみにしています。

サロンへのご案内を戴きながらいつも所要が重なり、今回初めての参加となりましたが、「名曲喫茶ウィーン」での開催が前回で終了したことを知り、非常に悔いが残りました。

半世紀を超えた札幌の生き字引のような竹津宜男さんの軽妙なナビゲーター役に当時を懐かしく思い出すことができました。

また、元コントラバス奏者の藤澤光雄さんの思い出の曲第100回定期(1970年)ブルックナー「交響曲7番」や、竹津さんの選んだ第121回定期(1972年)から「ドヴォー8」の演奏を聴きながら、お二人から当時のエピソードなどが話され興味津々...

この後、交流パーティーに入り、軽くアルコールも入って大いに盛り上がり、あつと言う間の3時間でした。

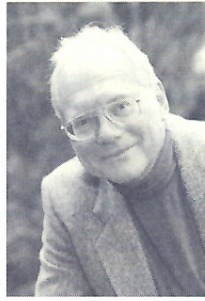
11月〜2月の定期・名曲シリーズ演奏会 演奏会を楽しく聴くために

八木 幸 三(札幌くらぶ会員)

第564回札幌定期演奏会

11月8日(金) 19:00
11月9日(土) 15:00

札幌コンサートホール大ホール
指揮/マックス・ボンマー
ピアノ/ジャン・マルク・ルイサ
ダ



マックス・ボンマー



ジャン・マルク・ルイサダ

■新実徳英/風水く弦楽、打楽器とチェレスタのために

中・高校生の合唱曲として人気の高い「聞こえる」や「むむの木震ふ」を作曲した新実徳英は、東京大学工学部を卒業後、東京芸大作曲科に進んだという俊英で管弦楽曲も「ヘテロリズム」宇宙樹」など個性的な作品を多く作

曲している。「風水」は92年から98年の7年間に書かれた宇宙、大自然との交流、そこに秘められているだろう音の発見と構築を目ざす一連の管弦楽作品のひとつである。風水とは、古代中国にあって山・巖・樹・川のあらゆる風景に浸透する玄妙なエネルギーの流れを探求する土地占いの法である。

■モーツァルト/ピアノ協奏曲第20番二短調 K.466

この曲が書かれた時期は、モーツァルトにとって絶頂期と言ってよい。コンスタンツェと結婚してウィーンの一等地に居を構え、人々からの絶大な人気をほくして集客数にも現れている。そうした中で生まれた二短調のピアノ協奏曲は、それまでの社交音楽としての協奏曲からロマン派を予告する芸術性の高いものへと深化させた。そして、ピアノフォルテという楽器の誕生は、豊かな強弱を曲想に込め、モーツァルトの音楽の源泉をさらに拡大させている。この曲が演奏された時、ハイドンは父レオポルトに「あなたの息子さんは、私が知っている作曲家の中で最も偉大な人です」と言った言

葉は有名である。ソナタ形式をとる第1楽章は、それまでにない斬新な構成により管弦楽とソロによる協奏性が一段と強まり、新しい緊張関係を築く。緩徐楽章は「ロマンツェ」と題されているが、中間部ではそれまでの気分から突如、激高させ劇的な起伏で聞き手に迫ってくる。続く第3楽章も、習慣的なロンド形式にとどまらない、複雑さを増したロンド・ソナタ形式で存在感十分な楽章を形作っている。この曲は、作曲当時からモーツァルトの協奏曲の中でも例外的な人気曲となり、ベートヴェンも自ら何度も演奏している。モーツァルト自身がカデンツァを残していなかったため、第1・3楽章用にベートヴェンがカデンツァを作曲したことは有名である。

■シューマン/交響曲第2番ハ長調

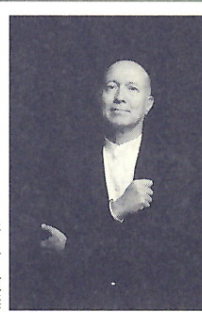
シューマンの交響曲は、そのオーケストレーションに欠点があるとと言われることがある。確かに総譜を見ると音符の多さと休符の少なさが目につくし、管楽器と弦楽器で同じ動きが多く、まるで吹奏楽と弦楽合奏が同時進行してい

る部分もある。しかし、彼の詩的な美しい旋律がそうした管弦楽法から柔らかな響きを放って、聴くものを虜にしてしまうのも事実。実質的には3番目の交響曲としてつくられたこの曲も、終楽章など俯瞰的に聴くと管弦楽の多層的な味わいが堪能できる。シューマンは、この作品を書いている頃かなり精神的に苦悩していた。しかし、クララと共に対位法とフーガを研究した成果がうかがわれ、弦のきざみが多く、木管とのバランスは難しいものの旋律の棲み分けは堅実に金管も効果的に扱われている。第2楽章の管と弦の競演による高揚感や第3楽章の木管重奏も聴きどころが多い。そして、その美しい旋律の中に悲痛な叫びも聞こえてくるかのようだ。L. パーンスタインが他界する直前、札幌ではじめて開催されたPMFで、この曲が演奏されたが、喉を押さえながら苦しうにリハーサルに臨むパーンスタインと、本番での彼の晴れやかな表情を収めた映像が鮮明な記憶として残っている。さて今回のマックス・ボンマーはどんなシューマンを聞かせてくれるだろうか。

森の響フレンド「コンサート」

札幌名曲シリーズ Vol.4
「バンドネオンに踊るマエストロ」

11月30日(土) 15:00
札幌コンサートホール大ホール
指揮/井上道義
バンドネオン/三浦一馬



井上 道義



三浦 一馬
©ピクチャーエンタテインメント

■グロフェ/組曲「グランド・キャニオン」

昔、ディズニー映画で「大自然シリーズ」というのがあったが、この曲を聴くと広大な情景がスクリーンに映し出される様がい出される。それほど音楽が、鮮明に情景を浮き上がらせているのは、ガーシユウインの「ラプソディ・イン・ブルー」をオーケストレーションしたグロフェの名人芸に他ならない。5つの楽章は、「日の出」「山道を行く」などそれぞれ明確な標題がついており、非常に親しみやすい旋律がグランド・

キャニオンの雄大な自然を見事に描写している。

■ピアノ/バンドネオン協奏曲

今では、すっかりクラシック音楽のジャンルに入っているピアノだが、彼の作品の中でも頂点に位置づけられるのがこの協奏曲だ。ダイナミックな管弦楽ではじまり、バンドネオンの独奏が、その魅力をつつりと伝えるこの曲は、1979年にプエノスアイレス州立銀行提供のラジオ番組の委嘱により作曲された。第2楽章の叙情的な旋律は、つい愛の言葉を囁きたくなるほどロマンチックだ。第3楽章はタンゴらしい軽快なリズムが楽しめる。

■「コプリランド/バレエ組曲」

「コプリランド/バレエ組曲」最近はめつたに西部劇など観る機会がないが、昔は「シェーン」 「荒野の七人」などカッコいい主人公に憧れたものだ。実際に実在したピリー・ザ・キットという無法者も数多くの映画に登場しているが、この曲はコプリランドの「3大バレエ」の中で最初に作曲されたものである。演奏会用組曲はバレエ全曲から主要部分を抜粋し、序曲を含め7つの部分からなっている。カウボーイ・ソングや、スクエア・ダンスの旋律がふんだんに採り入れられ、どこか懐かしい映画音楽のような親しみやすさを感じる。

第565回札幌定期演奏会

12月6日(金) 19:00
12月7日(土) 15:00
札幌コンサートホール大ホール
指揮／アラン・プリバエフ
ヴァイオリン／川久保賜紀*



アラン・プリバエフ
©Simon van Bostel



川久保 賜紀 ©Yuki Horii

■ベルリオーズ／歌劇「トロイアの人々」より「王の狩と嵐」

「トロイの木馬」で知られる古代ローマの詩人ヴェルギリウスの長編叙事詩「アエネイス」を題材に、ベルリオーズが晩年に完成させた歌劇「トロイアの人々」は、上演時間が4時間にもおよび大作である。オペラの第1幕、戦勝の祭典場面での行進曲は有名だが、

第4幕の第1景で演奏されるこの曲は、英雄アエneasとカルタゴの女王ディドとの悲恋の発端ともいえる狩とそれを襲う嵐の様子が描かれている。

■ショーン／詩曲

フランス近代音楽の作曲家として知られるエルネスト・ショーンは、フォーレやドビュッシーと同世代だが、四十代半ばという若さで亡くなっている。この曲は彼が亡くなる2年ほど前に書かれ、もともとツルゲーネフの小説に触発された交響詩となる予定だったが、名ヴァイオリニストのイザイがヴァイオリン協奏曲となることを期待した。しかし、ショーンは、この時オペラの大作を作曲中で、協奏曲よりも規模の小さいヴァイオリンと管弦楽のための小品として完成させた。全体的にエレガントな楽想で、独奏ヴァイオリンの奏でる感傷的な旋律は聴き手の琴線にふれることだろう。

■ラヴェル／ツイガヌ

1924年にピアノ伴奏によるヴァイオリン曲として完成され、同じ年に管弦楽伴奏として編曲された。「ツイガヌ」とは、ハンガリー・ジプシーのことで、ジプシー音楽的な旋律が独奏ヴァイオリンで情感たっぷりに演奏され、チャールダーシュの形式に従って音楽は展開される。ちなみに先日、音楽評論家の奥田佳道氏とお会い

した折、「ジプシー」ということばをNHKの放送で使うと始末書ものという話を聞いた。ジプシーは差別用語として扱われ、NHKでは放送禁止になっていると言った。正しくは、「ロマ音楽」となるのだが、やはり「ジプシー音楽」の方が雰囲気的には馴染む。川久保賜紀のヴァイオリンから、この「ジプシー音楽」の妖艶な超絶的技巧が聴けるのが今から楽しみだ。

■プロコフィエフ／バレエ組曲「ロミオとジュリエット」より

シエイクスピアの不滅の名作「ロミオとジュリエット」は、これまで何度か映画化され、また「ウエストサイド物語」のように、これを原作に新たな形で作られている作品もある。音楽ではベルリオーズの劇的交響曲やチャイコフスキーの幻想序曲も有名だが、ゲノーもオペラを残している。しかし、近年ではCMやフィギアスケートなどでお聴きになるプロコフィエフのバレエ音楽は、あの特徴的な旋律ですっかりお馴染みになってしまった。プロコフィエフは、米国に亡命し欧州を渡り再びロシアに帰国したが、それまでの前衛的な作風から社会主義リアリズムによる大衆的な作品を書くようになった。この作品は「ビーターと狼」同様その頃の作品である。15年ぶりに祖国に戻ったプロコフィエフは、かねてから課題で

あった単純で表現的な手法の発見に努力した。その時、たまたま出会ったこの物語の人道主義的な詩的内容に魅了させられたプロコフィエフは、彼の新しい試みに合致していることを確信し、バレエ音楽として作曲をはじめた。そして、この作品で彼は、実験主義から自然主義へ、モダニズムからロマンティズムに復帰し、困難な転換期を克服した。

第566回札幌定期演奏会

1月31日(金) 19:00
2月1日(土) 15:00
札幌コンサートホール大ホール
指揮／マティアス・パーメルト
ヴァイオリン／ペク・ジウヤン



マティアス・パーメルト



ペク・ジウヤン

■ハイドン／交響曲第55番「校長先生」

交響曲をソナタ形式を含む4つの楽章として、オーケストラの重要なジャンルに確立させたのは、ハイドンとモーツァルトである。ハイドンとモーツァルトは年齢差はあったが同時代に生きており、モーツァルトはハイドンをひじょうに尊敬していた。そして、二人は交響曲の作曲においても互いに影響し合っていた。この曲は、緩徐楽章と終楽章が変奏曲になっているが、このことは以前にはほとんどなく、ハイドンの軽快な様式への転換点を示す作品と言えよう。「校長先生」という愛称がついているが、この名前の信憑性は今ひとつで、知られている限りの18世紀中の資料には現れていない。

■ブルッフ／ヴァイオリン協奏曲第1番

叙情的で優美な旋律でヴァイオリンの魅力がたっぷりと味わえるこの曲は、ブラームスやメンデルズゾーンと並び、ヴァイオリン協奏曲の中でも傑作中の傑作だ。ブルッフは、ヴァイオリン協奏曲を3曲残しているが、彼がコブレンツの管弦楽団指揮者を務めていた28歳の時に書かれたこの曲が最も有名になった。旋律は、いくぶん感傷的な甘さがあり、ヴェルトゥオーソ好みの演奏効果がある。形式は3楽章ながら、通常の協奏曲形式からみればかなり自由で、第1楽章は特に前奏曲とされている

ほどである。この力強い主題を持った第1楽章に続き瞑想的な緩徐楽章、そして躍動的で華やかな盛り上がりをもつ終楽章へと続く。適度な超絶技巧を伴いながら楽器を十分に歌わせる美しい旋律をどうぞお楽しみ願いたい。

■モーツァルト／セレナーデ第9番「ポストホルン」

セレナーデは、祝典や祭事、夜会などで演奏される実用性の高い社会的で娯乐的な音楽として作曲された。このジャンルは、ディヴェルティメントと同様18世紀に盛んに作られた器楽曲だが、ディヴェルティメントは室内楽的な傾向が多く見られるのに対し、セレナーデは交響的色彩が強い。

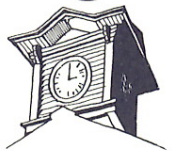
二十歳を過ぎたモーツァルトは、パリ・マンハイム旅行の後、故郷のザルツブルグに戻り、大司教に大きな不満を抱きながらも宮廷音楽家として務める。その大司教の霊名の祝日のためにこの曲はつくられようだが確証はない。マンハイム旅行などで触れた音楽の影響もあり、この曲はモーツァルトの創意に溢れ7つの楽章からなる大規模な構成で、しかも前後に2曲の行進曲を付随することもある。郵便馬車が合図に用いたポストホルンが、第6楽章のメヌエットで使われているためにこの曲名がついた。

(写真協力／札幌交響楽団)

札響物語 63

札響の50年を振り返る(6) 練習場(真駒内時代)

竹津 宜 男 (札響くらぶ会員)



常任指揮者がP.シュヴァルツだった時代の途中で札響の練習場は大丸藤井ビル5階から真駒内青少年会館に移動し1976年まで続く。真駒内青少年会館には宿泊施設や研修室、プール、屋内体育館と600席の座席を持つホールが有ってこのホールが札響の練習場として毎年100日間以上合奏練習に使われていた。客演する国内オケの常任指揮者達に、P.シュヴァルツが来てから札響の音が際々輝いて来たのはこのホールでの日々の練習のお陰だよ、とよく言われた。練習場とは言っても、

予定だったがバス時間の関係で10時30分から午後4時30分になった。当初は大多数の団員がバス利用者だったが練習場が街なかの大丸藤井ビルから真駒内に替わったのを機会に運転免許を取得して自家用車で通う人が増えた。真駒内に替わった頃は十台ほどしかないに増え始めた頃は初心者が多かったためか中古車や軽自動車が増えた。演奏旅行は万が一事故があった時の保証の責任の重大性を考えて管理者側は公共交通機関で移動するよう決めているのだが広大な北海道は過疎化も進んで公共交通機関も間引かれ公共交通機関だけでは楽団員の移動が事実上不可能になって来た。公共交通機関に乗る原則は原則として自家用車移動を黙認するのが段々と原則(?)のようになって来た。事務局は時刻表をにらみ出先で利用する交通会社から情報ももらいながら演奏旅行のスケジュールを組むが、公共交通機関では全く不可能な場合は出先で貸し切りバスを利用するこ

ともあった。十分過ぎる調べをした上で予定を組むのだが北海道内の移動は実際に現地に行ってみないとんでもない目に遭うことがある。私にとって忘れられないのは今は廃線になった国鉄池北線(十勝の池田駅から北見駅の間を走っていた)の日に1本しかない急行「池北」に乗らなければならないかつた時だった。スケジュールを組んだのは半年前で急行「池北」はディーゼル車2両編成だが実際に乗る時にはディーゼル車が1両編成になっていた。前日は帯広での乗り打ち公演(移動してその日に演奏する)だった。公演地がよほど遠かったりプログラムがとんでもないだったりすると演奏への影響を考えて自家用車移動は敬遠される。この時も乗車する楽団員が50人以上もいてチェロも何本か持ち込まれた。指揮者の座席をやつとの思いで確保したがコンサートマスター、佐々木一樹は「若いから」と自ら立ちっぱなしの2時間余りだった。地元の人々に同情されながらも大変申し訳ない思いをし文字通り身の置き場もない、謝りようのない針のむしろに乗っての移動だった。

口も走っているのに」と持ち主の顔を仰いでドロツと黒いオイルが付いオイルゲージを見せた。「新車は1,000キロか1ヶ月でオイル交換しないと」と注意され弁当を食べ終るとあわててガソリンスタンドへオイル交換に走ったものだった。弦楽器奏者でもメカに滅法強い人は多いのだが一般的に管楽器奏者は弦楽器奏者よりメカに強いのか、おせっかい焼きが多いのだろうか。

趣味を持つ楽しさ

札響くらぶサロンの開催を知ったとき、プログラムを見て荒谷さんの時代を知らないのが、最初のころは参加しても話が判るか、話に入っていないか不安が半分、楽しみが半分という相半ばした気持ちでした。

会を重ねるごとに皆さんのサロンに臨む意気込みが感じられ、いまは次回が開催が待ち遠しく思えてきています。

会場となった名曲喫茶「ウィーン」は50年くらい前に待ち合わせの場所として一度行ったことがありましたが、本当に久々に入店しました。

クラシックファンといっても、ほんの一部しか知らないものが参加して話を合わせられるのか、と

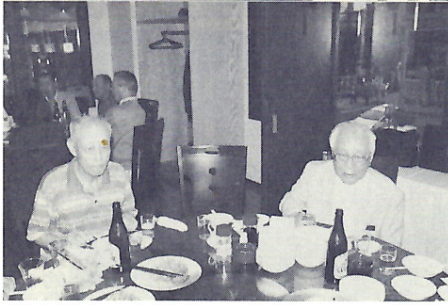
思ったものです。

竹津さん、鷲頭さん、上野さんの興味深い話題と司会に、名曲名演に聴き入りしました。

当日、出席した皆さんの音楽に対する内容の詳しさ知識の深さには脱帽しました。札響の歴史も少しずつ判ってきて「名と実」を備えて現在に至っているのだな、と心強く思うものです。

場所を変えてからは、雰囲気も皆さんの表情も一変して和やかになり、話題も豊富で2時間があっというまに経って閉会のときを迎え、次回の開催を楽しみに帰路につきました。

懇親会の「残響」に浸りながら小樽までの車中の1時間でした。(くらぶ会員 木立)



上:名曲喫茶「ウィーン」、下:懇親会での筆者(左)

宮の森中学校からの手紙

一般財団法人札幌市職員福利厚生会協賛事業

5月の定期演奏会（18日）では宮の森中学校吹奏楽部の生徒さん達49名を招待しました。その生徒さん達からお手紙をいただきましたので一部を紹介いたします。紙面の都合で全てを紹介する事が出来ませんが、できるだけ多くを紹介するため、前文や末文、後書を削るなどの修正を加えております。（定政、中居）

一曲目のティンパニ協奏曲では、何時も一番後ろにいてオルガン側からは見えにくかったティンパニが指揮者の隣にいるのを見て「この曲を演奏出来るのはとても幸せなことなんだろうな」と思いました。この曲ではティンパニの様々な音色を聴くことができて、とてもよかったです。

高橋聖純さんのフルートの音色は本当に心に沁みました。私もいつかあのような音色に少しでも近づけるように、これからも日々の練習に力を入れていきたいと思いました。

ティンパニ協奏曲では、両手で違うテンポを叩いていること、ロールの速さ、強弱の差、スティックを4本も持って4台を同時に鳴らすことに驚きました。プロは違うと思います。また、フルートは勉強になりました。ワン・フレーズというより

は、一音一音で表情を変えて吹いていることが伝わってきました。

とても一体感を感じる演奏でした。さらにティンパニなどいつもはあまり目立って聴かない楽器のソロなども聴けて嬉しかったです。体全部で聴く、そんな感じの音楽だと私は思いました。

特にすごいと思ったことは、どれだけ沢山の楽器が奏でていても、目立つべき音がしっかりと目立ち「今はあれが主役なんだ」と伝わってくることです。また強弱なども差がハッキリとして分かりやすいし、fも全て同じfではなく違った雰囲気を持っていたところがすごいと思いました。

私たち中学生でこれから先、今回見つけた「すごい！」というものを真似していくのはとても難しいことだとは思いますが、あんな音楽を作れるように頑張りたいと思います。

ブルックナーの交響曲第7番ホ長調は聴く前に「ブルックナーは中学生には難しくて理解できない」と聞いていて、やはり細かい所などを理解できたわけではありませんが、楽章ごとの穏やかな感じや力強い雰囲気を感じられました。

また、いろんな楽器がそれぞれに目立って印象的でおもしろかったです。特にコントラバスがとてつもない迫力があった感動しました。

ティンパニ協奏曲はとても迫力があり、強弱の付け方などが参考になりました。ティンパニなどの打楽器はふつうの曲では裏方になりがちですが、今回のように打楽器がメインの曲もよかったです。音の厚みや音楽の大きさも、さすが札幌だなと実感しました。

交響曲第7番はⅢスケルツォ（とても速く）のTPソロと弦楽器が交互にあるところが好きだなあ。ワークナーチューバ初めて見た。どこのソロも音が大きく太くて素晴らしい。弦楽器は繊細な音でキレイ。65分も演奏なんて私

は、体が持たないななどと思いましたが、私は低音楽器を担当していて低音を聴いていたのですが、金管の高音の迫力がすごかったです。また、高音の細かい動きがきれいでした。最後に演奏した曲の第3楽章が一番心に残っています。

先生に「1曲約65分で中学生は飽きるかもしれない」と言われましたが飽きずに聴くことができました。

主役がティンパニという一生で一度聴けるかどうかのチャンスなので、絶対に行きたいと思いましたが、主役がティンパニというのはどういう風になるのかワクワクしていました。

始まる時にまずティンパニが前に出ていることに驚きました。曲が始まってからは、ずっとマレットを見ていると玉が浮いて見えて感激しました。他の楽器もたくさん音があるのに、まるで1つの玉が鳴っているような感覚になりました。

テリヘンのティンパニ協奏曲では最初の方にトランペットのソロがあって、とてもか素晴らしかったです。ティンパニは迫力がありステージから離れた3階の席に座っていた私にもその音の勢いや強さが伝わってきました。曲の

最後は弾けるような音色で思わずびくっとしました。ティンパニ協奏曲は今まで一度も聴いたことがなかったのでもいい経験になりました。

ブルックナーの交響曲第7番ホ長調は先生に「中学生には難しい」と言われていたので、どんな曲なのかと楽しみにしていました。この曲もトランペットが何回かソロがあつたり盛り上がる所でパーンと聴こえてきて素晴らしかったです。ソロがあるたび身を乗り出して聴いていました。チェロがメロディのところは一つのチェロがものすごく大きな音で弾いているかのようにびたりと音程があつていて感動しました。1時間5分がとても短く感じられました。

私はホルンを吹かせて頂いているのですが、交響曲の最初にホルンが入るところでは音色に透明感があり、ホルンの良さを改めて実感することができました。さらに途中のホルンが全員で吹いている時の迫力や音量・音色には圧倒されました。

ホルン以外にも弦楽器の一体感、フルートの響き、トロンボーンの高い音色などさまざまな部分で感動しました。今までは吹奏楽にしか興味がありませんでしたが、これからはもっと視野を広げ、様々な音楽に目を向けるようにしたいと思います。

私がいよいよ残っているのはティンパニでメロディを作れるということです。私の中ではあまり音程のある楽器という印象はなかったのですが、あのような演奏を聴きとても感動しました。強弱や速度が目まぐるしく変わっていくというのもとてもよかったです！

また、他の楽器の音も聴こえて絶妙なバランスだったためとても素敵でした。ティンパニ以外の奏者の方も音の強弱や高低の違いが素晴らしかったです。

私は部活でチューバを担当しているため、玉木さんを良く見ていましたが、チューバは1人だということも気付かせないくらいチューバの音が伝わってきたと思います。また、自分が吹いていない時も集中力を切らすことなくさらに楽器の扱いもとても丁寧で尊敬しました。これからの練習では玉木さんを見習い、しっかりと目標を持って頑張りたいと思います。何時も応援しています。札幌を!!

これまで先輩の演奏は聴いていましたがプロの皆さんの演奏は初めて聴いたのでとても上手くてビックリしました。これからは定期的に聴きに行きたいと思います。

第562回定期演奏会練習見学会に参加して

2013年9月19日、定期演奏会の練習見学会に行ってきました。



左からロビンソン、ローケス、ツウイオクの各氏(写真提供・札幌)

見学会のことは以前から知っていましたが、なかなか日程が合わず、参加できませんでした。今回は平日ながら、18時45分開始のため、参加することができました。

受付を済ませ、会場について18時10分には、既に数人の楽団員が舞台で練習をしていました。1階の客席に降りてきて、舞台の音から離れて練習している楽団員もいます。

定刻になり、全体練習が始まります。指揮者がときおり、合唱団の音量調整等のため、演奏を中断することがありました。

今回は、テノール独唱者とバリトン独唱者は舞台上にいますが、混声合唱団とソプラノ独唱者は舞台奥の客席に、児童合唱団は舞台裏に、それぞれいるため、特に舞台裏の合唱団の位置関係や音量の調整に時間が割かれていました。特定の演奏者に厳しい注文をつけるといようなことはありませんでした。

終調整」に重点が置かれていました。前半よりも、演奏者たちの間に笑いが起こることも多くなりました。

そして、「この曲の思いを伝えよう。」との指揮者の言葉で、練習は終了しました。予定時間より約15分早い終了でした。

その後、独唱者の3人が、札幌の街や会場の印象、それに演奏曲目への思いを語り、見学会も終了となりました。3人は、通訳の方と一緒に、参加者がいる客席まで来て下さいました。

公演の前日であったため、本格的な「練習」そのものではなかったかと思いますが、憧れの職業である音楽家が、公演前どのような準備をしているのか、垣間見ることができ、貴重な時間を過ごすことができました。(岸田)

札幌ソノマス大平美子さんの「コトニクラシック」

今年の3月寒い中、7月久しぶりの猛暑、9月初秋の季節とすでに3回、地下鉄琴似駅コンコースのメトロギヤラリー前広場で「コトニクラシック」を奏でて



コトニクラシック(1) (写真・西区役所提供)

います。

地下鉄発着の度に騒音と共に大きな風が吹く場所で、乗降する市民がヴァイオリンの音色に振り返り立ち止まる、笑顔になる。そして300人超える子供も大人も駆けつけるまじの風景もいものです。大平さんが言います「楽しい！一言です。ストリートミュージシャンになった気分！」地下鉄の騒音の中で答えてくれました。

主催の西区役所地域振興課知野課長さんは、コトニクラシックの仕掛け人「まちのにぎわいを！上質な音楽を気軽に感じてほしい」と。子供連れのお母さんが「小さい子供と一緒にカタラにいけないので」と、アニメの曲だとう！ (札幌くらぶ 西川)



コトニクラシック(2) (写真・西区役所提供)

アンコール曲、予想がびたりと的中

大平由美子ピアノリサイタル

9月24日(火) 19:00、キタラ小ホールに大平由美子さんのピアノ・リサイタルを聴きに行ってきました。音楽の専門的な事は詳しく分かりませんが、前半、白いドレスで演奏されたモーツァルトの「ソナタ第11番」は柔らかな音色のバリエーションで始まり軽快なトルコ行進曲で終わり、ベートーヴェンの「ソナタ第31番」では最後に重たくて強い和音が続きそこから何かが変わったかのように終

わりに向かって行きました。そして後半、青いドレスに衣装替えて、大平さんがピアノ独奏用に編曲したシューベルトの「白鳥の歌」より3曲とシューマンの「管弦楽のない協奏曲」が演奏されましたが、優しくて美しいアレンジのピアノと苦悩の中の重たさを感じられるピアノと続けて聴いた感じです。ドレスの色から想う雰囲気とプログラム4曲の曲想がとても合っていると感じたのは自

子供たちが手をつないで演奏に合わせて踊りだす、音楽あふれるまちさつぽろの原風景がここ琴似にあります。なんて素敵なんだろう！ (札幌くらぶ 西川)

分だけでしょうか？

私の中のマイブームで、コンサート中の休憩中に「今日のアンコール曲は何だろうな」と考え予想する事があります。

今回は最後のシューマン辺りから間違もなくブラームスの晩年の小品、それも大好きな間奏曲かな？(が、いいな)と思っていたら、メンデルスゾーンの無言歌集からの1曲でしたが、もう1曲最後の最後の曲がびたりとブラームスのそれでした。

会場を出て中島公園を歩いている時のちよっと涼しい湿った空気感と、落ちてくる葉の一枚とブラームスの音数の少ない静寂な一音一音に、今まさに秋なんだなと感じました。最後、地元札幌の聴衆への大平さんのお話も感慨深く、とても印象強いピアノ・リサイタルとなりました。(上野)



大平由美子ピアノリサイタルの前半で、白いドレスで演奏している大平由美子さん ©Nozomu MIKAWA

コバケンと都響と三浦サン

9/15 東京都交響楽団札幌特別講演会を聴いて

東京には一体いくつオーケストラがあるのだろう。N響、日フィル、新日本フィル、読響…まだまだある。さらに東京には有名な海外オケも次々とやってくる。そんな東京で「都響が聴きたい」と選ばれ続けているのはすごいことだと思ふ。

都響の創設は、前の東京オーリンピックの時、もうすぐ50周年を迎えるようだ。

さて、三大ヴァイオリン協奏曲の一つとして有名なこのベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲だけれど、今日のプログラムノートによると、あのヨアヒムが少年の時に、あのメンデルスゾーンの指揮



東京都交響楽団（サントリーホールにて。写真提供：東京都交響楽団）
撮影：池本さやか

会報への寄稿をお待ちしています

演奏会を聴いた感想、交流会や札幌くらぶサロンに参加した感想、クラシック音楽に関する想い出、好きな曲・思いつきの曲やオーケストラに関する事などの随想、詩や俳句・短歌、会報に関する事など特に内容は問いません。

寄稿は、ハガキ、封書又はメールで、住所・氏名・会員番号（以上必須事項）・電話番号等連絡先を添えて、「札幌くらぶ事務局宛お送りください」（あて先メールアドレスはページ目のタイトルの下を参照のこと）。

寄稿は原則として「実名」でお願いいたします。匿名やペンネームではお受けしておりませんので、ご了承ください。

寄稿の期限はありませんが、3月20日、6月20日、9月20日、12月20日までにお寄せいただいた寄稿は、4月、7月、10月、1月それぞれの月の下旬発行予定の会報に掲載させていただきます。ただし、都合により掲載できない場合があります。その場合はご本人に直接連絡申し上げます。

（事務局長 武藤義典）

密さの中に割って入りたがるのかもしれない。

そのブラボーに比べて三浦さんはバツハをアンコールに弾いてくれる。コバケンさんはちゃっかりと第2ヴァイオリンの方の椅子に座って聴いていた。

後半はブラームス4番。前半の少しおとなしい感じを取り返すかのような激しくも美しい演奏。キタラの隅々まで都響の音よ響け！という感じでコバケンが音を飛ばしてやるのがわかる。

ブラボーに比べてコバケンさんご挨拶…「この大好きなキタラで…」という言葉に思わずうんうん

キタラで聴く都響は最高です！

札幌くらぶと都響倶楽部の懇親会

9月15日東京都交響楽団札幌特別公演を聴きにファンクラブの都響倶楽部から3名の方がやってきました。期せずして札幌くらぶメンバー5名と楽しく楽しいファンバトルが3時間も続きました。

やつてきたのは都響倶楽部代表篠原敏修さんと、メンバーの長坂成久さん、間宮大輔さんです。今年3月、代表の篠原さんとは札幌東京公演で交流し一献酌み交わし都響自慢を聴いていました…

…今回キタラで都響を聴く機会があり、ブラームス4番の演奏は重厚でコバケンさんと一体となった感動的な演奏会でした。3人が開口一番口をそろえて「キタラで聴く都響は一段と素晴らしい…」

んとうなずく。はいっ、私たち自慢のホールです！

そして、アンコールにはハンガリー舞曲第5番。知り尽くした都響とのびったりと息の合った、気持ちの高まりそのままの素敵な演奏だった。都響のみなさんは満ち足りた様子で仕事を終えたあとの握手を交わしていた。うらやましい…。

やはりその中には入れない聴衆としては、せめて盛大な拍手を最後まで送り続けた。コバケンと都響と三浦さん、ありがとうございました。（中居志津子）

「クトーク」を開催して、楽員さんが率先して参加していることや、楽員さんが退団後倶楽部運営にかかわってくれていること、忘年会を開催し楽員13名、都響事務局3名、都響倶楽部から27名が参加したことや、倶楽部は多様な人たちを受け入れながら現在100名程度の会員をさらに拡大していきたいと話していました。

札幌のファーストコンサートと同様に都響が行っている音楽鑑賞教室のことが話題になり、札幌くらぶの活動のなかで楽譜支援を絶賛していました。都響も音楽監督がインバル氏のと新たな体制を模索中とのこと。来る11月には、代表の篠原さんが仙台で開催されるJOFICには必ず参加しますとのこと一同盛り上がり、仙台で再会を約束しました。（札幌くらぶ 西川）



写真：左から長坂（都）、井上（札幌）、西川（札幌）、間宮（都）、中居（札幌）、定政（札幌）、篠原（都）、武藤（札幌）

随想 本棚の隅から 5

今年の秋は美しいだろうか、札幌定期公演の日が快晴ならいいのだけれど、などと思いつながら何気なく秋の色をした薄いプログラムを取り出してみた。

「岩城宏之札幌特別演奏会第19回サントリー音楽賞記念コンサート1988

武満 徹／弦楽のためのレクイエム
／ア・ウエイ・ア・ローンII
／ウオーター・ドリーミング

マラー／交響曲第一番三長調「巨人」
11月15日(火) 6時30分

北海道厚生年金会館

岩城さんが「頸椎後縦靭帯骨化症」の手術から復帰して指揮台に立つのを是非見なければならぬ

と思ってチケットを買いに行ったのを思い出す。

第19回「サントリー音楽賞」が岩城さんに贈られることになったのは、1973年以来14年間に涉つて常任指揮者を務めてきたメルボルン交響楽団を率いて、初めての日本公演(同交響楽団のはじめの海外公演)での、来日オーケストラとしては画期的な「オーケストラとして」の大成功だったことだそう。

ある音楽評論家の話に、常任指揮者としてメルボルン交響楽団を指揮するのを聞いて「ああこのオ

ケは札幌によく似ているなど思っ

た。」とある。そして岩城さんは「サントリー音楽賞」受賞記念のコンサートで、「札幌」の演奏で

するのだと決めていたという。私にとつて武満徹の曲が美しいと思つたのもこの時かもしれない。

岩城さんは、趣味の文筆活動も活発で「もし何か文学賞でももら

えたら、指揮者を辞めてもいいな。」と真顔で語っていたことも

あるという。彼のエッセイを読んでいると、時々札幌のことが出てくるので嬉しくなってしまう、私の愛読書の一つである。

この夏の入院中にしみじみ思つた。音楽を聴く趣味を持っていた良かつた、ただ寝ていても与えられる欲びを。(井上明子)

花束贈呈

ヴァイオリン奏者の佐々木倫子さんが、9月末日をもって退団されましたので、9月21日の定期演奏会終了後に花束をお贈りました。



スタッフの活動報告(平成25年7月～9月)

●第4回札幌くらぶ運営会議開催
7月8日(金) 18:00

エルプラザ4階男女共同参画研究室
担当/武藤事務局長他15名出席

平成25年度総会質疑における課題の検討、実施、担当者について、

JOFC in 仙台13の参加、中学生定期招待、札幌くらぶサロンの運営について協議する。

●札幌くらぶサロン運営会議
7月12日(金) 15:00～17:00

札幌エルプラザ2階打ち合わせコーナー
担当/上野スタッフ他3名出席

第4回札幌くらぶサロンの開催場所と日時及びプログラムについて協議する。

●会報「札幌くらぶ」第63号発行
7月23日(水) 15:00

札幌コンサートホール2階中会議室
担当/武藤事務局長他5名出席

会報「札幌くらぶ」第62号を800部を発行し、会員、報道機関へ発送、札幌関係へ配布しました。なお、発行は25日付となっている。

●プレイヤーズ・トーク等実施計画
策定

7月10日(水)～8月7日(水)
担当/井上事務局次長他2名

メール等で楽員に対する会報の「アンケートへのご協力をお願い」、同じく会員に対する「アン

ケートへのご協力をお願い」、プレイヤーズ・トークへの協力依頼ほか文案を作成する。

●第5回札幌くらぶ運営会議開催
8月9日(金) 18:00

エルプラザ2階12名用会議スペース
担当/武藤事務局長他11名出席

会報「札幌くらぶ」第63号・第64号編集企画、楽員との懇談会開催、プレイヤーズ・トーク再開、会報

に係る会員へのアンケート実施、楽員名鑑の作成、会報バックナンバーのキタラ設置、JOFC in

仙台の参加、第4回札幌くらぶサロン、札幌練習見学会などについて協議する。

●札幌くらぶサロン運営会議
8月26日(月) 13:00～15:00

エルプラザ2階打ち合わせコーナー
担当/上野スタッフ他2名出席

第4回札幌くらぶサロンの会場設定及び飲食物の手配及び第5回以降の内容について協議する。

●JOFC in 仙台(第7回総会)
参加ツアースケジュール決定

8月28日(水)
担当/武藤事務局長

参加者10名のうち8名の航空券の予約を委託していた「株トラベルe旅」から予定どおりの便の予約完了の連絡があり、ツアー代金

が確定し、参加者10名にスケジュールとツアー代金の連絡を行う。

●第6回札幌くらぶ運営会議開催
9月3日(金) 17:30

札幌コンサートホール2階大会議室
担当/武藤事務局長他13名出席

会議では会報「札幌くらぶ」第64号編集企画について、会報記事のペンネームについて、会報に係る会員へのアンケートについて、第4回札幌くらぶサロンについて、札幌練習見学会について、会員証の発送についてなどの協議が行われた。

●第4回札幌くらぶサロン開催
札幌市教育文化会館4階研修室402号室
9月7日(土) 17:30

名曲喫茶「ウィーン」から会場を移し、第4回札幌くらぶサロン(第1部 ゲストが語る札幌名演奏の思い出、第2部 札幌アーカイブスシリーズ、第3部 交流パーティー)を開催、会員はじめ35名が参加、皆さん終了まで楽しく過ごされ、3名の方から参加した感想の寄稿をいただきました。

●第562回札幌定期演奏会練習見学会実施
9月19日(木) 18:45～21:00

札幌コンサートホール大ホール
担当/武藤事務局長

今年度第1回目となる札幌定期演奏会練習見学会を、札幌と合同で合せて85名が参加、うち札幌くらぶ会員は16名参加した。

◆今号から記事を署名入りで書くことにした。実はちょっといやだ。よく知りもしないのに書いていますので。でもいいか、この程度でいいなら投稿してください。投稿が増えるかも。投稿、お待ちしています！(静)

◆プリテンの戦争レクイエムこんな曲があったのか！素晴らしい一言。大小のオケにもびっくり！合唱にもブラボー、挑戦する札幌がサイコー(よしだけ)

◆初めて原稿を書いた。いつも思うが、文章は短くする方が難しい。必要なことだけ、思いを込めて書くよい訓練になった。(岸田)

◆「どこが綺麗な」と思う紅葉の季節になった。去年は大沼へ行ったけれど、今年は北大構内と中島公園をぶらつくだけになりそう。(A・I)

◆この秋に聴きたい曲は、ブラームスの晩年のピアノ曲で間奏曲117-1をお勧めします。大平由美子ピアノリサイタルのアンコールで聴けて幸せでした。(上野)

編集後記

◆今号から記事を署名入りで書くことにした。実はちょっといやだ。よく知りもしないのに書いていますので。でもいいか、この程度でいいなら投稿してください。投稿が増えるかも。投稿、お待ちしています！(静)

◆プリテンの戦争レクイエムこんな曲があったのか！素晴らしい一言。大小のオケにもびっくり！合唱にもブラボー、挑戦する札幌がサイコー(よしだけ)

◆初めて原稿を書いた。いつも思うが、文章は短くする方が難しい。必要なことだけ、思いを込めて書くよい訓練になった。(岸田)

◆「どこが綺麗な」と思う紅葉の季節になった。去年は大沼へ行ったけれど、今年は北大構内と中島公園をぶらつくだけになりそう。(A・I)

◆この秋に聴きたい曲は、ブラームスの晩年のピアノ曲で間奏曲117-1をお勧めします。大平由美子ピアノリサイタルのアンコールで聴けて幸せでした。(上野)

◆今号から記事を署名入りで書くことにした。実はちょっといやだ。よく知りもしないのに書いていますので。でもいいか、この程度でいいなら投稿してください。投稿が増えるかも。投稿、お待ちしています！(静)

◆プリテンの戦争レクイエムこんな曲があったのか！素晴らしい一言。大小のオケにもびっくり！合唱にもブラボー、挑戦する札幌がサイコー(よしだけ)

◆初めて原稿を書いた。いつも思うが、文章は短くする方が難しい。必要なことだけ、思いを込めて書くよい訓練になった。(岸田)

◆「どこが綺麗な」と思う紅葉の季節になった。去年は大沼へ行ったけれど、今年は北大構内と中島公園をぶらつくだけになりそう。(A・I)

◆この秋に聴きたい曲は、ブラームスの晩年のピアノ曲で間奏曲117-1をお勧めします。大平由美子ピアノリサイタルのアンコールで聴けて幸せでした。(上野)

◆今号から記事を署名入りで書くことにした。実はちょっといやだ。よく知りもしないのに書いていますので。でもいいか、この程度でいいなら投稿してください。投稿が増えるかも。投稿、お待ちしています！(静)

◆プリテンの戦争レクイエムこんな曲があったのか！素晴らしい一言。大小のオケにもびっくり！合唱にもブラボー、挑戦する札幌がサイコー(よしだけ)

◆初めて原稿を書いた。いつも思うが、文章は短くする方が難しい。必要なことだけ、思いを込めて書くよい訓練になった。(岸田)

◆「どこが綺麗な」と思う紅葉の季節になった。去年は大沼へ行ったけれど、今年は北大構内と中島公園をぶらつくだけになりそう。(A・I)

◆この秋に聴きたい曲は、ブラームスの晩年のピアノ曲で間奏曲117-1をお勧めします。大平由美子ピアノリサイタルのアンコールで聴けて幸せでした。(上野)